青少年らしき

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

5月

早ね早おき朝ごはん運動

「明るい家庭づくり」作文

「明るい家庭づくり」作文は家族の役割、家庭のあり方など、日頃から家庭について考えていることをテーマにした作文です。令和元年度は、小・中学校から二七八四点の応募がありました。各学年一点、倉敷市長表彰の優秀賞、各学年二点、優良賞が選考されました。先月号に続き、優秀賞の中から二作品を紹介します。

やっとできた新しい家

呉妹小学校　六年
田中　千陽

「おめでとうございます。」
拍手が響きました。今日は、おじいちゃんとおばあちゃんの新しい家が完成した日。建設してくれた会社の人がカギと花束を持って、出迎えてくれました。おじいちゃん、おばあちゃん、家族もみんな、うれしい笑顔で泣いていました。

七月九日、西日本豪雨でおじいちゃん、おばあちゃんの家は全壊しました。ぼくの家に避難していたので命は助かりましたが、着ていた服とくつ、乗って来た車だけになりました。暑い中、みんなで重たい畳や家具を運び出しました。水にぬれた古い写真や、おじいちゃんの表彰状、おばあちゃんと結婚した時の着物もありましたが、お母さんが、

「ぬれて助からないよ。水も出ないから洗うこともできないし、二人に見せないように捨てるしかない。」

とぼくに言いました。着物はあきらめましたが、ぼくは写真と表彰状を持って帰りました。そしてタオルでふいてかわかしました。

「それは捨てたらいけん。」

「捨てんともう使えん。」

と耳をふさぎたくなるようなけんかが始まりました。お父さんやお母さんがゴミ置き場に捨てた物を、おじいちゃんとおばあちゃんは持って帰ってきます。

「いつまでも片付けられんから。」

「みんなわかっているんだけど、ひとつひとつ思い出がつまっているから、すぐには気持ちの整理がつかないんじゃ。」

と、悲しい気持ちでいるぼくに、お兄ちゃんが教えてくれました。日やけして真っ黒な顔に流れる汗が涙みたいに見えました。

何日も何日も、みんなでがんばりました。

「水分とって。おにぎり食べて。」

「大丈夫？休んでからにしよう。」

ぼくの役割は、おじいちゃんとおばあちゃんに水分補給をすることです。ずっとそばにいて倒れないように見守りました。

「ありがとう。ありがとう。」

たびたび言わなくてもいいのに。

そんな苦労が少し遠い日のように感じるくらい時間がたって、やっと今日、新しい家ができました。おじいちゃん、おばあちゃんがうれしそうで本当によかったです。携帯で写真や動画をとりました。そしてお世話になった人に送りました。ぼくは何度も見返します。みんなも何度も何度も見ています。

しばらくは、二人ではさびしいから、みんなで新しい家に住むことにしました。にぎやかにすごしているうちに、おじいちゃん、おばあちゃんの悲しみが和らいでくれますようにと祈っています。元気で長生きしてね。おじいちゃん、おばあちゃん。

「青竹」水墨画
倉敷市立第一中学校
３年　竹中　琉偉（令和元年度）
青竹の勢いや力強さを表現しよと思いました。

我が家の洗濯名人

琴浦中学校　三年
岡本　汐月

「汐月。陽大。早よ起きろ。」

毎朝我が家には雷が落ちる。ばあちゃんが私達を起こす声だ。眠いからもう少し、とぐずぐずしていると、声はだんだんヒステリックになっていく。

「あぁ。またばあちゃんが叫んどる。」

うつらうつら考えながら起きる。一日が動き出す。

我が家の朝食は、いつもパンだ。私とばあちゃんの好みは似ていて、いつも食べたいパンが重なる。ちょっとした取り合いの後、ばあちゃんは決まって、

「やっぱりこっち。こっちが食べたい。」

と別のパンを選び、私にパンを譲ってくれる。ばあちゃんがわざわざ譲ってくれたのであろう事は分かっているが、取り合いに勝てたようで、うれしくなる。

「どうせ私は洗濯ばばあじゃ。」

ばあちゃんの口ぐせだ。私の家は九人家族。そのため、毎日洗濯物が大量に出る。朝早く起きて洗濯物を干し、日中は良く乾くようにと干す場所を移動させる。夕方取り込んで、九人分に分けてきれいにたたむ。それからアイロンだ。それらの仕事をばあちゃんは、真心込めてしてくれている。だから私達の洗濯物は、パリッと乾いていて、きちょうめんにたたんであり、気持ちの良い状態で戻ってくる。本当に感謝している。

しかし、ばあちゃんのぐちを聞くと、いつもイラッとする。

「みんな私をいい小間使いやと思っとる。」や「動くのはいつも私。」とぐちを言うのだ。別にそんな事はない。それに、私達がそんな風に思っている訳でもない。

学校へ行くまでの間、空を見ていると、

「ちょっと手伝ってくれん。今日は、洗濯物がいつもより多いんじゃ。」

と言われた。正直びっくりした。ばあちゃんは、いつも一人でテキパキと仕事をこなしていく。洗濯を手伝ってと言われた事は、今までに一度もなかったのだ。ばあちゃん疲れとるんかな、と少し心配になった。

それから数日後、私の心配は的中した。突然ばあちゃんが病気で入院したのだ。病院にお見舞いに行くと、ばあちゃんの顔は青黒く苦しそうにゆがんでいた。注射や点滴のため腕は青紫に腫れていて、見ていられないほど痛々しいのに、

「あぁ。大丈夫よ。もうなれたわ。」

そう言って、一番辛いはずのばあちゃんは笑った。何もしてあげられない自分が、ただただ歯がゆくて仕方がなく、悔しかった。

ばあちゃんが家にいない生活が始まった。朝、私達を起こしてくれる声は聞こえず、大好きなパンがあっても、それを取り合う相手はいない。寂しかったが、悲しんでばかりもいられなかった。ばあちゃんがいつもしてくれている仕事を、みんなで協力して行わなければならないからだ。仕事は予想以上に多く、特に洗濯は時間も手間もかかった。雑にたたまれた大量の服を見て、私はばあちゃんの言葉を思い出した。

「どうせ私は洗濯ばばあじゃ。」

ばあちゃんの言っていた事は、あながち間違いではなかったのかもしれない。私は、ばあちゃんが洗濯をしてくれるのは、当然の事と思い込んでいたのだ。ばあちゃんのいない生活をしてみて、私達はばあちゃんに頼りすぎては、ダメだと気付けた。退院祝いには、ばあちゃんの好きなパンと、日頃なかなか伝えられていない感謝の言葉をプレゼントした。少し照れながら喜んでくれて、本音を言えてよかったとホッとした。ばあちゃんは、長い年月をかけて大量の洗濯物を、一人でこなしてきたから名人になれたのだなと思う。

「ばあちゃんは、洗濯名人。」

今では、私から洗濯を手伝っている。それにもう、私はばあちゃんに起こされたりしない。

「これからは、私がばあちゃんを支える。」

そう心に誓ったからだ。そのために、今自分にできる精一杯の事をしていこうと思う。

また朝がやってくる。私は、息を思いきり吸って叫ぶ。

「ばあちゃん。おはよう。」

一日が動き出した。